

*All I Asking for Is My Body*に見られる ハワイ日系人のアイデンティティ

木 下 英 文

はじめに

Joseph(1987)は、フィクションで描かれる人物が実在する人間よりも現実味を帯び得る、と指摘しているが、その理由として、人物のアイデンティティ描写がより明示的に行われる点を挙げている¹⁾。名前付けによるカテゴリー付与は相互行為におけるアイデンティティ構築の指標となるといわれるが(Bucholtz and Hall:2005:594)、フィクションで描かれる人物のアイデンティティは名前付けによって具体的にどのような形で表現され得るのだろうか²⁾。本稿は、ハワイ日系人家族を描いた日系米国人作家Milton Murayamaの小説*All I Asking for Is My Body*で用いられる他者言及表現に着目し、言及対象に付与されるカテゴリーの特徴づけと名称の使い分けを検討することで、フィクションで呈示されるハワイ日系人のアイデンティティの諸相を明らかにすることを目的とする。

1. アイデンティティとコミュニケーション

アイデンティティについての考察は、心理学、社会学、人類学など様々な分野からのアプローチが試みられてきたが(Mead, 1934;エリクソン, 1973)、相互行為の分析においては、Widdicombe(1998)が指摘するように、言及対象が

持つ属性が何であるかではなく、アイデンティティがどのように構築されるかが重要となる³⁾。Communication Theory of Identity (CTI) は、伝達行為という観点からアイデンティティを動的に捉えようとする理論であるが、個人のアイデンティティを多層的に捉える点にその特徴がある。以下、その概略を名前付けとの関連で述べてみたい。

CTIは、個人のアイデンティティが相互行為を通じて形成され、以下の4つの層で構成されると考える⁴⁾。

- (1) a. personal layer
- b. enacted layer
- c. relational layer
- d. communal layer

ここで、(1a)は個人が持つ自己像を指し、“self-concept, self-image, self-cognitions, feeling about self, and/or spiritual sense of self-being”を含むとされる(Hecht, *et al.*, 2005:263)。例えば、(2)を考える。

- (2) A: Do you consider yourself as a Japanese or an American?
 B: I consider myself as an American.

ここで、自らの定義付けを求める話者Aの質問に対する話者Bの回答で示された“an American”は話者Bの自己像を表現したもので、これはpersonal identityに関わる内容だといえるだろう。(cf. Mead, 1934)

次に、(1b)のenacted layerは、コミュニケーションにおける発語内効力との関わりで考察されるアイデンティティを指す。具体的には、(3)に見られるような相互行為に戦略的に組み込まれるアイデンティティの側面に関わると考えられる。

- (3) A: I can't make it tomorrow. Sorry.
B: That's all right, Sensei. Maybe next time.

ここでは、話者Aの断りを受け入れる話者Bの発話（3B）において、“Sensei”が挿入されることで日本語と英語の混在が生じているが、この日本語の呼称使用は、話者Aの社会的立場への配慮を示すと共に相手文化への理解も示すことで、話者Aの断りに伴うFTA (Face Threatening Act)を軽減する役割を果たすと考えられる。(cf. Brown and Levinson, 1987) このような当事者間で交渉されるアイデンティティは“positioning”とも呼ばれるが (Davies and Harre, 1990; Hall, 1996)、enacted layerはコンテキストとの関わりで話者の意図とストラテジーを分析する際に焦点が当てられるアイデンティティの側面である。

一方、(1c)のrelational layerは、他者との関係で調整されるアイデンティティを指し、とりわけ、他者の視点や役割関係の影響が考察の対象になる。(4)を考える。

- (4) A: Mom will be here in five minutes.
B: I see.

ここで、話者Aが用いた“mom”は言及対象に母親としてのアイデンティティを与えるが、それは同時に、会話参与者である話者Aと話者Bの立場関係 (e. g. 兄弟、父子等) も示唆することとなる。この点で、relational layerはenacted layerよりも当事者間の背景的情報に焦点を当てており、社会言語学的な性質を持つものであることがわかる。

最後のcommunal layerは、個人と帰属集団との関係で捉えられるアイデンティティを指すが、その表明は帰属集団間の境界の明示化を伴う。従って、communal layerはしばしば具体性を欠いた抽象概念で示される場合があるが (Joseph, 1987:5)、(5)のように付与されたカテゴリーの詳細を検討することでその具体的内容の考察が可能となる。

(5) A: What do you think of Japanese?

B: I like them a lot. They are very polite and hard-working.

Bucholtz and Hall (2005:594) は“... the linguistic elaborations and qualifications they (=referential identity categories) attract (predicates, modifiers, and so on) all provide important information about identity construction”と指摘しているが、ここでは、“very polite and hard-working”が話者Bによる言及対象である“Japanese”の評価を表すことになる。このように、発話レベルでのコンテクスト精査は、アイデンティティ構築に関わる社会的意味を明らかにする上で有効である⁵⁾。

以上、CTIが提示する4つのアイデンティティの層を概観したが、この理論は、個人がコミュニケーションを通してアイデンティティ構築を試みる過程を考察する際に多面的な分析を可能にする点で有効である。とりわけ、本稿で取り上げる移民家族の世代間に見られるアイデンティティの問題について、この理論は当事者間の立場設定をlayer間の衝突という点から動的に捉えることが期待できる (Hecht, *et al.*, 2001)。次節では、カテゴリー化によるアイデンティティの明示化とコミュニケーションの関係について述べる。

2. カテゴリー化とアイデンティティ

名前付けは、言及対象へのカテゴリー付与を明示するという点で、アイデンティティの考察には有用な指標である⁶⁾。そして、このカテゴリー化は、人間が自らの経験を効率よく構造化し、情報を整理するために不可欠な過程として、日常生活の中で無意識に行われる。しかし、カテゴリー化が無意識に行われることは、それが客観的な尺度で行われることを保証するわけではない。むしろ、(6)でSpreckels and Kotthoff(2009)が指摘するように、それは主観的性格を持つ分類行為だといえる。

- (6) In categorization it is always a matter of more than a pure assignment of persons to larger units and of the thereby achieved structuration, or respectively simplification, of the world. Interactants often categorize with a specific intention, which can be conversation-organizationally conditioned.

Spreckels and Kotthoff (2009: 424)

すなわち、カテゴリー化は相互行為における個人の具体的意図 (“a specific intention”) に基づいて戦略的に行われる行為なのである。

また、カテゴリー成員の条件に関する認識は、必ずしも成員が持つ属性に基づくものでない点にも注意が必要である。Bucholtz and Hall (2005) は、その判断の柔軟性について(7)のように指摘する。

- (7) The term adequation emphasizes the fact that in order for groups or individuals to be positioned as alike, they need not – and in any case cannot – be identical, but must merely be understood as sufficiently similar for current interactional purposes. ...similarities viewed as salient to and supportive of the immediate project of identity work will be foregrounded. (99)

すなわち、当該状況において話者が言及対象を自らの帰属集団として認識する場合、その類似点が意図的に強調され、相違点はトーンダウンされるというのである。ここで重要なことは、話者は自らの帰属集団に対して「同一」 (“identical”) である必要はなく、「当座の相互行為における目的のために十分な類似性 (“sufficiently similar for current interactional purposes”) を呈示すればよい、という点である。このように、特定の集団への帰属は相互作用におけるニーズに応じて常に変化し得るものであり、アイデンティティが動的な性格を持つものであることが分かる。

3. 日系一世のカテゴリー化：使い分けられる名称

ハワイにおける日系米国人の経験をOyama家を舞台に四部作として描いたMilton Murayamaは、その第一作*All I Asking for Is My Body*(1975)において、祖国の文化を保持しようとする一世と、ハワイ生まれで英語を母語とする二世の親子間の軋轢を中心テーマとして扱った⁷⁾。そして、これら親子のアイデンティティの表現手段として、Murayamaは4種類の言語変種を物語に取り入れた。物語の冒頭、Murayamaは語り手の二男Kiyooに次のように語らせる。

- (8) ...we spoke four languages: good English in school, pidgin English among ourselves, good or pidgin Japanese to our parents and other folks. (5)

ここで、最初の2つは英語の標準変種 (“good English in school”) と非標準変種 (“pidgin English”) をそれぞれ指すが、次のKiyooの語りから、当時のハワイ社会におけるこれらの言語変種間に階層化が生じていたことが窺える⁸⁾。

- (9) Whenever anybody spoke good-good English outside of school, we razzed them, “You think you haole, eh?” “Maybe you think you shit ice cream, eh?” “How come you talk through your nose all the time?” Lots of them talked nasally to hide the pidgin accent. At the same time the radio and haole newspapers were saying over and over, “Be American. Speak English.” Pidgin was foreign. (63)

すなわち、当時のハワイ社会におけるピジン英語の使用は、移民労働者としてのアイデンティティを表す標識となっていたのである(Wilson, 1981:64)。

次に、残り2つの変種である“good or pidgin Japanese”についてであるが、これらは主にハワイ生まれの二世が英語の運用能力が限られた一世に対して用いる日本語を指す。ただ、小説内におけるピジン英語や日本語の扱いについては、Oyama家の親子間における日本語での会話では標準英語を使用することで

それを日本語による会話とみなし、ピジン日本語には、その使用頻度は限られているものの、ローマ字で表記が行われている。

以下の分析では、Oyama家の家族間のやり取りに焦点を当て、日系一世または祖国の日本人を揶揄する目的で用いられるJapaneseとBulaheadの用例分析を通して、それらがカテゴリー化するものと、当小説で描かれるハワイ日系人のアイデンティティとの関係を考察する。

3.1 世代間の日本語による会話：Japaneseの意味するもの

以下では、作品中4度用いられる他者言及表現Japaneseによって表現される日本的なものについて考える。上述の通り、以下のやりとりは作品中では日本語で交わされたものとみなされる。まず、(10)を見る。

(10) “We should know our place and not anger them. That’s the only way we’ll gain their respect,” father said.

“That’s the trouble with the Japanese, they’re yellow balls...” (37)

これは、サトウキビ農場で起こったフィリピン系移民労働者のストへ日系人労働者が合流することの是非を巡る父親と長男Toshとの論争の件であるが、父親がJapaneseに自らの立場をわきまえ農場主の信頼を得る (“know one’s place” “respect”) ことの重要性を説くのに対し、Toshはそのような考えを持つ者にJapaneseというカテゴリーを付与し、臆病者 (“yellow balls”) という否定的特徴づけを行っている。ここで注目したいのは、父親が包括的一人称複数 (“we”) を用いることで家族のアイデンティティ (relational layer) の構築を働きかける一方で、ToshはJapaneseという名称を用いることで、互いが拠り所とする文化 (communal layer) の違いを示している点である。このことは、(10)が単なる世代間の意見の相違ではなく、集団と個人の利益が競合する場合についての文化的価値観の衝突 (Hofstede, 1991) を含むものだといえる。

(11) “The newsreel is a lie,” father said.

“Boy, you Japanese are really blind!” Tosh said. “It’s there in front of your eyes and you say, it’s a lie! You just can’t see! You don’t see what’s out there, you only see what’s inside your head. Like grandfather. ...” (44)

(11)は、日本軍による南京虐殺を巡る父親と長男Toshとの言い争いの一部であるが、ToshがJapaneseの形容に用いた“blind”は、日本人の過度の従順さへの批判であると同時に、祖国の文化に囚われるあまり現実社会に適應できない一世を揶揄したものである。ここで、Toshは、同格を用いることで父親にJapaneseのカテゴリー付与 (“you Japanese”) を行うことで、上記(10)よりも直接的な形でcommunal layerにおける境界を示していると考えられる。

(12) “You can’t go yet,” mother turned to Tosh. “Every child must repay his parents.”...

“Get out!” father said again.

“See what I mean?” Tosh said. “The Japanese are so unrealistic. Take yourself. You can’t support your own family. You need my help. But instead of being nice to me, you treat me like dirt. ...”

“Someday you’ll have your punishment. You’ll have an unfilial son like you,” mother said. (45)

(12)は、家族を養う親の役割とそれを助ける子の役割についての両親とToshの言い争いの場面であるが、Japaneseが“unrealistic”と形容されることで親孝行なるものの理不尽さへの反発ならびに、祖国の考え方にこだわる一世への批判が、Toshによって展開される。ここでToshが用いたJapaneseは、形式上第三者を言及するが、後続の二人称代名詞は、両親とToshのcommunal layerのアイデンティティの衝突を示している。一方、母親は日本的なものを否定するToshに“You’ll have an unfilial son like you”と応じていることから、親子というrelational

layerのアイデンティティ構築の働きかけが行われていることがわかる。

(13) “You’re full of selfishness. You’re not a Japanese.”

“All I’m asking for is my body. I’m not even asking for a high school education.”

“Every child must repay his parents.” (57)

(13)も親孝行を巡る親子間のやりとりであるが、ここでは一世である母親自身がJapaneseを用いることで、そのカテゴリー成員の条件に反するToshを“full of selfishness”と形容することで、互いの帰属集団間の境界を示している。このことから、ここでも、個人と集団（＝家族）の利益が両立しない場合、どちらを優先するかという価値観の問題が、双方の帰属集団の認識にズレを生じさせていることがわかる。一方、母親の“Every child must repay his parents”という言葉は、親子というアイデンティティ（relational layer）から発せられたものであり、(12)と同様、アイデンティティの多層性を示すものだと見える。

以上、Oyama家の親子間のやりとりで用いられたJapaneseという名称に考察を加えたが、それは集団主義、親孝行など一世と二世で解釈の違う文化的要因に焦点を当てる役割を果たすことが明らかとなった。具体的には、Japaneseが移民家族にとって世代間で選択がしばしば分かれ得る集団への帰属意識（communal layer）を明示することで、親子という役割上選択の余地のないアイデンティティ（relational layer）を巡る登場人物のアイデンティティの葛藤が表現されるのである。

3.2 Bulaheadとピジン英語

Bulaheadという蔑称は、一般的に知られるBuddhaheadとは区別されるもので、Murayamaによる造語ではないかと考えられる⁹⁾。Murayamaは、続編の第三作*Plantation Boy* (Murayama, 1998)において、BulaheadがBuddhahead誕生以前から存在し、その語源が第二次世界大戦以前に遡るものであることを、Toshの親友

Happyの(14)の言葉で明かにしている。

- (14) It's Bulahead. Buddha's got nothing to do with it. It comes from bobura or the raised-in-Japan bumpkin. Boburahead became burahead, then Bulahead. It started as a putdown, then we started calling ourselves Bulaheads too. (33)

bobura(またはboboraと表記)とは、ポルトガル語に由来する日本語の方言で南瓜を意味する「ボウブラ」に相当するもので、headと組み合わせることで「田舎者」「間抜け」との意味を表すとされる。Murayamaは、BulaheadがBuddhaheadの軟化したものだと考え、それに「日本臭さが抜けない田舎者」という否定的意味を持たせたのである¹⁰⁾。以下では、当小説で用いられたBulaheadの5例を分析することとする。まず、(15)を考える。

- (15) “You know, he oughta quit fishing. There’s no more fish left in the sea. All it does is we go deeper in the hole and Mama over-worries and overworks. And damn wahine, she too superstitious. She thinks she goin’ die, she believe in it. She talk to you about it?” “No.” “Yeah, she no can get it out of her head.” “Why?” “They all like that. Bulaheads are crazy.” (14)

これは、長男Toshが二男Kiyooに対し、父親の漁が不振で負債が膨らむ中で苦勞する母親が、迷信を信じて自らの短命を決め込んでいることを語る場面である。ここでは、Bulaheadsというカテゴリーを母親に付与することで帰属集団間の境界を示した上で、そこに“superstitious” “crazy”という属性が与えられている。「罰」という東洋的な因果の概念を共有しないToshにとって、祖国は自らのアイデンティティを帰属させる対象でないことが示されており、価値観の違いがアイデンティティ呈示によって表現された例である。

(16) “Bullshit. These Bulaheads, they no can see they so poor because they poop so many kids. At least mama wants us to be something more than plantation workers, but she wants you to do it after she been squeeze twenty years out of you. Papa, he been do his big thing already, he was a filial number one son, so now he figure his turn to sit back and catch the gravy. I doan think it bother him if we all die on the plantation so long as we filial and give him lotsa face.” (48)

(17) “You see the dumb Bulaheads, they like it for their sons to be dumb. They like them to obey. They consider you a better man if you said yes all the time.” (68)

(16)と(17)では、Toshが自身の親孝行の解釈をKiyōに披露している。まず(16)では、親の負債を背負うことの理不尽さが語られており、Bulaheadsには“poor” “having many children” “filial piety” “face”といった属性が結び付けられている。一方、(17)のBulaheadsは“obey” “yes”が結び付けられ、親の命令に子供を服従させようとする姿が否定的に評価されている。

(18) “Yeah,” Tosh said, “the Bulaheads, they good underdogs, but they get the swell head when they get on top.” (66)

ここでは、Toshが「下の立場では卑屈に振る舞い」(“good underdogs”)、「上の立場になると傲慢になる」(“they get the swell head when they get on top”)という日本の精神風土を批判している。英語と異なる日本語のコミュニケーション・スタイルの特徴の一つは、相手との立場関係によってストラテジーを変えることだとされるが¹¹⁾、両文化における言語行動の違いからこのような特徴付けが行われた例である。

(19) “The dumb Bulaheads been bomb Pearl Harbor,” Tosh said. He said in Japanese, “*Nihon ga Paru Haba kogeki shita.*”

“It must be a mistake,” mother said. (78)

ここでは、Bulaheadsの使用とコード切換えの組み合わせがToshのアイデンティティの呈示に意味を持たせている。Toshはピジン英語で日本のパール・ハーバー攻撃に言及する際に“dumb Bulaheads”を使用し、それを日本語で母親に伝える際に“*Nihon*”を用いているが、前者の蔑称に込められたニュアンスが母には伝わっていない。このようなコード切換えは、communal layerにおけるアイデンティティの境界を示すものであるが、ピジン英語は内集団の成員のみに解釈可能な暗号の機能を果たすものであり、言語変種の使い分け自体がToshの二世としてのアイデンティティを表現する標識となっていることがわかる。

以上のように、BulaheadにもJapaneseと同じく二世にとって異質と感じられる祖国の文化風習がその特徴として付与されていることが認められた。「親孝行」や「罰」の概念、また、日英語間のコミュニケーション・スタイルの違いが、帰属集団の境界を設ける標識として用いられており、これらが特定の名称と結び付けられることで、communal layerにおけるアイデンティティ・ギャップが表現されると考えられる。ただ、Bulaheadの場合、ピジン英語との共起関係も忘れてはならない。ピジン英語は内集団のコミュニケーションの手段として使われるものであり、その使用自体が話者の帰属集団を強く主張するため、このようなピジン英語の使用は、同じ言語変種を共有するToshとKiyooの仲間意識を間接的に強化する点で大きな役割も果たすといえるだろう。

お わ り に

本稿では、Milton Murayamaの*All I Asking for Is My Body*で描かれたハワイ日系人家族Oyama家内でのやりとりに見られるJapaneseとBulaheadという他者言

及表現に着目したが、それらの使用で関連づけられる祖国日本特有の文化的要因が彼らのアイデンティティの葛藤に関わることが認められた。具体的には、Japaneseが一世と二世の排他的関係を明示するのに対し、Bulaheadは二世同士の関係強化を示す役割を果たすことが明らかになった。これはCommunication Theory of Identityで示されるアイデンティティのlayer間の衝突の事例であり、親子という立場関係で定義づけられるrelational layerのアイデンティティとcommunal layerにおけるそれが一世と二世で共有されない場合、帰属集団の違いが明示化されることで、相互行為におけるアイデンティティを巡る駆け引きが生じると考えられるのである。このように、CTIはアイデンティティを多層で捉えることによって相互行為におけるアイデンティティ構築の考察を可能にするため、文学作品における名前付けの機能については、今後もより詳細な分析が期待できるといえよう。

註 釈

- 1) "...fictional characters can seem more 'real' than real people, because their identities are wholly contained." (Joseph, 1987:4)
- 2) "Identity relations emerge in interaction through several related indexical processes, including:
(a) overt mention of identity categories and labels..." (Bucholtz and Hall: 2005:594)
- 3) "...the important analytic question is not [...] whether someone can be described in a particular way, but to show that and how this identity is made relevant or ascribed to self or others."
□Widdicombe, 1998 : 191)
- 4) 詳細についてはHecht, *et al.* (2005)を参照。
- 5) 木下 (2009, 2010) は、同様のアプローチによってハワイ日系人が用いる蔑称であるhaoleとkotonkについて分析を行った。
- 6) とりわけ米国社会において民族アイデンティティを付与する名称 (labels) が果たす役割は大きい、とWitterborn (2003) は指摘している。
- 7) *All I Asking for Is My Body* (1975)、*Five Years on a Rock* (1994)、*Plantation Boy* (1998)、*Dying in a Strange Land* (2008) の四作。

- 8) 異なる言語を母語とする一世が集まったサトウキビ農場で生まれ、一世の話す簡易補助言語であるビジン英語を母語として習得した二世の言語は、正確にはハワイ・クリオール英語と呼ばれ、区別される。
- 9) Buddhaheadは、日系米国人またはアジア系米国人を指すとされ、その由来については諸説があるものの、第二次世界大戦中に組織された日系人部隊において本土出身の日系人兵士がハワイ出身の日系人兵士を指して用いたのが始まり、とするものがよく知られている。
- 10) 本稿ではこの語の实在の可能性について立ち入ることはしない。
- 11) 例えば、日本語の断り行動では立場が上と下では感謝や謝罪が用いられる頻度が異なることが明らかになっている。(Beebe, et al., 1990; Barnlund and Yoshioka, 1990, etc.)

参考文献

- Barnlund, D. and M. Yoshioka(1990). Apologies: Japanese and American styles. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 193–206.
- Beebe, Leslie M., T. Takahashi, and R. Uliss-Weltz(1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. Scarcella, et al., eds., *Developing Communicative Competence in a Second Language*. Rowley, MA: Newbury House Publishers, pp.55–73.
- Brown, P. and S. Levinson(1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bucholtz, M. and K. Hall(2005). Identity and interaction: a sociocultural approach. *Discourse Studies*, 7, 585–614.
- Davies, B. and R. Harre(1990). Positioning: The Discursive Production of Selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20 (1), 43–63.
- Erikson, E. (E.エリクソン) (1973) 小此木啓吾訳『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』誠信書房
- Hall, S.(1996). Introduction: Who Needs Identity? In S. Hall and P. du Gay, eds., *Question of Cultural Identity*. London: Sage, pp.2–17.

- Hecht, M., et al. (2001). A Layered Approach to Ethnicity, Language and Communication. In H. Giles and W.P. Robinson, eds., *The New Handbook of Language and Social Psychology*. New York: Wiley, pp.429 – 450.
- _____ (2005). A Communication Theory of Identity: Development, Theoretical Perspective, and Future Directions. In W.Gudykunst, ed., *Theorizing about Intercultural Communication*. Thousand Oaks: Sage, pp.257 – 278.
- Joseph, J. (1987). *Language and Identity*. Basingstoke: Palgrave.
- Kinoshita, H. (木下英文) (2009). 「ハワイ日系人の用例に見る haole の社会的意味」『愛媛大学法文学部論集』第27号69 – 82頁.
- _____ (2010). 「Kotok使用に見られる日系米国人のアイデンティティについて」『愛媛大学法文学部論集』第29号23 – 36頁.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and organizations : software of the mind*. New York: McGraw-Hill.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Murayama, M. (1975). *All I Asking for Is My Body*. San Francisco: Supa Press.
- _____ (1994). *Five Years on a Rock*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- _____ (1998). *Plantation Boy*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- _____ (2008). *Dying in a Strange Land*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Spreckels, J. and H. Kotthoff (2007). Communicating Identity in Intercultural Communication. In H. Kotthoff and H. Spencer-Oatey, eds., *Handbook of Intercultural Communication*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 415 – 439.
- Widdicombe, S. (1998). Identity as an Analysts' and a Participants' Resource. In C. Antaki and S. Widdicombe, eds., *Identities in Talk*. London: Sage, pp.191 – 206.
- Wilson, R. (1981). The Language of Confinement and Liberation in Milton Murayama's *All I Asking For Is My Body*. In E. Chock and J. Manabe, eds., *Writers of Hawaii: a focus on our literary heritage*. Honolulu: Bamboo Ridge Press, pp.62 – 65.
- Witteborn, S. (2003). Communicative competence revisited: An emic approach to studying intercultural communicative competence. *Journal of Intercultural Communication Research*, 32(3), 187 – 203.

「All I Asking for Is My Bodyに見られるハワイ日系人のアイデンティティ」正誤表

ページ	誤	正
81 (下から9行目)	Japaneseに自らの	自らの
82 (上から9行目)	行うことで	行い
83 (上から7行目)	用いることで	用い
83 (上から12行目)	lager	layer
83 (下から7行目)	アイデンティティの 葛藤	葛藤
83 (下から2行目)	<i>Plantation Boy</i> (Murayama, 1998)	<i>Plantation Boy</i> (1998)
84 (上から8行目)	Buddhahead	Boburahead
87 (下から8行目)	□Widdicombe	Widdicombe